

隆從歌集

及清家集

完

西山隱居錄

卷之三

十一

西山陸龍齋集

已錄

三
二

新

五

陸龍齋集

陸龍齋集

陸龍齋集

四本

用子 經 濟 學 概 論

第 一 章 經 濟 學 概 論

第 一 章

第 一 章

第 一 章

第 一 章

第 一 章 經 濟 學 概 論

子 經 濟 學 概 論

用子紙書寫

...

...

山
野
江
東

口の邊や相る草は花中に花は花うつく
ほは白く花はうつくしき花をささくや
花は花のうつくしき花をささくや

花は花のうつくしき花をささくや

花は花のうつくしき花をささくや
花は花のうつくしき花をささくや

花は花のうつくしき花をささくや

花は花のうつくしき花をささくや
花は花のうつくしき花をささくや

花は花のうつくしき花をささくや

花は花のうつくしき花をささくや
花は花のうつくしき花をささくや

花は花のうつくしき花をささくや

花は花のうつくしき花をささくや
花は花のうつくしき花をささくや

花は花のうつくしき花をささくや

花は花のうつくしき花をささくや
花は花のうつくしき花をささくや

花は花のうつくしき花をささくや

花は花のうつくしき花をささくや
花は花のうつくしき花をささくや

花は花のうつくしき花をささくや

花は花のうつくしき花をささくや
花は花のうつくしき花をささくや

花は花のうつくしき花をささくや

花は花のうつくしき花をささくや
花は花のうつくしき花をささくや

花は花のうつくしき花をささくや

花は花のうつくしき花をささくや
花は花のうつくしき花をささくや

この心は、
...

本志と心は、
...

...

...

...

...

...

陸花

...

...

...

...

...

...

...

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dark ink on aged paper and is oriented vertically. It appears to be a formal or official communication, possibly related to the events mentioned in the adjacent page.

又そのの社業も四柱の事

陸奥

六に於てゆゑの田圃に置かざるをたけとて年の平あらし

月

沖津風とあかききそをく使の江はまおれとくそあつ月お

Faint handwritten text, possibly bleed-through from the reverse side of the page. The characters are difficult to decipher due to fading and the cursive style.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a personal note, written on aged paper.

高輪

Main body of handwritten text in a cursive script, continuing the letter or note from the previous page. The text is dense and fills most of the page.

那の雲はそも明也山は風雲の中が如く舟の山は水
に雲より下りて山は雲は一話出の雲を云ふこと
ありありと推測のたふさふさの故に法に傳へし
つと一樹の陰の如きはそも多少に傳へるゝことより
直後を推し傳へるゝことより又少くは伝へるゝこと
と云ふことありありと早きことと云ふことあり
物一石の清く方なきことと云ふことありと法に傳へ
しは御傳へた傳へるゝことと云ふことありと法に傳へ

作是沙弥長生の臣ち在蘇雄と云ふ事人知い
かしく天の寸草もくまもなき事今なき事あり
いふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
いふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
いふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
いふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
いふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
いふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
いふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

一 昔の物語に...
 一 昔の物語に...
 一 昔の物語に...
 一 昔の物語に...
 一 昔の物語に...

早稲

一 昔の物語に...
 一 昔の物語に...
 一 昔の物語に...
 一 昔の物語に...

一 昔の物語に...
 一 昔の物語に...
 一 昔の物語に...
 一 昔の物語に...

うしともし一巻をせし考一巻を中奇の心をほほほのめ
あつて同じくひらきくま風へしよきし。是れ但てふま
し相つうくふまはひのうり

つうしつひ考一巻をせし考一巻を中奇の心をほほほのめ
あつて同じくひらきくま風へしよきし。是れ但てふま
し相つうくふまはひのうり

一巻を中奇の心をほほほのめ
あつて同じくひらきくま風へしよきし。是れ但てふま
し相つうくふまはひのうり

つうしつひ考一巻をせし考一巻を中奇の心をほほほのめ
あつて同じくひらきくま風へしよきし。是れ但てふま
し相つうくふまはひのうり

つうしつひ考一巻をせし考一巻を中奇の心をほほほのめ
あつて同じくひらきくま風へしよきし。是れ但てふま
し相つうくふまはひのうり

[Faint, illegible handwriting, likely bleed-through from the reverse side of the page.]

山本友誼のまゝに

物持のついで形も左形くつりも右形の中其の中其の
るをよきとすべく白の花は白いつつりたるまゝに
やまひするあまのこゝろをよきとすべく白の花は白いつつりたるまゝに
河内郡此位ありしを誼客も其の誼客も其の誼客も其の誼客も
んともくつりて其の誼客も其の誼客も其の誼客も其の誼客も
布もよきとすべく白の花は白いつつりたるまゝに
は城のついで形も左形くつりも右形の中其の中其の
とよきとすべく白の花は白いつつりたるまゝに
とよきとすべく白の花は白いつつりたるまゝに
とよきとすべく白の花は白いつつりたるまゝに

殊といひ置つておらう

積善行はりの徳に神も人を愛する事ありて此の徳を以てして
而して我を愛する事なき我の徳を以てして我を愛する事ありて
つゝはる事ありぬ事ありて我を愛する事ありて

心は人の善事を行ふに満ちたる有る事ありて是れ徳の功と
申す事ありて此の徳を以てして我を愛する事ありて此の徳を以てして
我を愛する事ありて此の徳を以てして我を愛する事ありて
此の徳を以てして我を愛する事ありて此の徳を以てして我を愛する事ありて

其の徳を以てして我を愛する事ありて此の徳を以てして我を愛する事ありて
此の徳を以てして我を愛する事ありて此の徳を以てして我を愛する事ありて
此の徳を以てして我を愛する事ありて此の徳を以てして我を愛する事ありて

物も人の善事を行ふに満ちたる有る事ありて是れ徳の功と

と申す事ありて此の徳を以てして我を愛する事ありて此の徳を以てして我を愛する事ありて
此の徳を以てして我を愛する事ありて此の徳を以てして我を愛する事ありて
此の徳を以てして我を愛する事ありて此の徳を以てして我を愛する事ありて

今もよく別と申す事ありて此の徳を以てして我を愛する事ありて此の徳を以てして我を愛する事ありて
此の徳を以てして我を愛する事ありて此の徳を以てして我を愛する事ありて
此の徳を以てして我を愛する事ありて此の徳を以てして我を愛する事ありて

あまうこれの徳を以てして我を愛する事ありて此の徳を以てして我を愛する事ありて
此の徳を以てして我を愛する事ありて此の徳を以てして我を愛する事ありて
此の徳を以てして我を愛する事ありて此の徳を以てして我を愛する事ありて

行禮

今もよく別と申す事ありて此の徳を以てして我を愛する事ありて此の徳を以てして我を愛する事ありて
此の徳を以てして我を愛する事ありて此の徳を以てして我を愛する事ありて
此の徳を以てして我を愛する事ありて此の徳を以てして我を愛する事ありて

今後亦在すのうらみと云ふれつゝ、若し此をなすべしと云ふは、
とくも、とくも、主木之出、

Handwritten text in cursive script, likely a continuation of the main text or a separate entry.

陸長

○此れ、
不志心抄者、

浦島子

今甲子年、
法を承りて、
子孫傳へて、

菊長子

行人

此のうもは此の訪め如くくるとクアノクアノ中
○少き御
此の影もいふた御影御くす
此の影もいふた御影御くす

甲寅
○よつ有つ
此の影もいふた御影御くす

此の影もいふた御影御くす
此の影もいふた御影御くす

此の影もいふた御影御くす
此の影もいふた御影御くす

雪中

雪のくもは枝をたつさひて
雪のくもは枝をたつさひて

夜松

松のくもは枝をたつさひて
松のくもは枝をたつさひて

雲

雲のくもは枝をたつさひて
雲のくもは枝をたつさひて

去

去のくもは枝をたつさひて
去のくもは枝をたつさひて

風竹

風竹のくもは枝をたつさひて
風竹のくもは枝をたつさひて

雪

雪のくもは枝をたつさひて
雪のくもは枝をたつさひて

花言仙會

花の言をききしにかなしく思ふ所かとの。さうのまゝのてし

花言仙會

あふんの言をききしにかなしく思ふ所かとの。さうのまゝのてし

花言仙會

さうの言をききしにかなしく思ふ所かとの。さうのまゝのてし

共妻よりありては、稱ひくうかきうまつくおれり

花言仙會

花言仙會

花言仙會

花言仙會

花言仙會

花言仙會

花言仙會

花言仙會

花言仙會

花言仙會

田之記

一つとさむと住一のせとれていふ事下り

うす下か那う下つてよへぬうう年方有

十月四日年抄国紙といまめやくやく 陸尾

杉のこゝろをいふやうに味とれをいふは室談といふ年

終切撫合の人さん かつるふれい画 陸尾

折形にぬき神のうらゑとする里をいふとす

陸尾のうらゑのうらゑ

陸尾のうらゑのうらゑ

わがをそとせえとてす梅をそとては長うすれわか

をいふんは梅のうらゑとてす梅をそとては長うすれわか

夕ほれとて梅のうらゑとてす梅をそとては長うすれわか

春

陸尾

野下ろし梅をそとすれとてす梅をそとては長うすれわか

尾之五

一ツツと心なするに、
十月廿五日、
...

終つて白く三人

...

...

...

...

...

十月廿五日

...

...

...

...

...

...

...

小ぢのてし流

筑紫竹中玄悟

長歌

○ 插品並とていふをまこめよふ

白妙のて少うすつてををとおりの雪まのつはるほりたをを行をこしをい
あさらんげをこつて水でよらふ... 身短ひく水つくまこととれは雲煙の
ふもい雲うらゝゆをさうしとをゆつとまはるるまよはてさワヤエ
いふは古昔「...」なゆつてあをるしを水に初つるふ時を縁まつ
よめてたつのもふあゝあらうらうらむくのこをんくふまふふふふ
うねとせうひをせうつくまのあやのり

反古

とそをのばしりもるるに和菫葉ふそそ外のまを待つをり

○ 詠物とくとくさうくくうよ

をとましくもあるうらうのこほよくうん誰う作きて風のよめを

切あさし。使いあきまきまをりてんをさ切あさめよんらぬを非
せしむる。そのきつひなうるをきつひはさしけいりていんあは
まてつのもつて来つんをよまきもたぬを在るが音と厚にほまの
名をよまけり方たたり物なりゆふふいふよまきもたぬを
作らぬよまのつゝ君は六尼の中程実なるまゆをしをけぬまを
と結しとせきまをひつれりて思ふことこそよまきもたぬを
つをまはけりてんをよまきもたぬのこそ申らんをよめめてつをま
をひりてしをけぬはしつとてさるもをたれをたなり(わ)つれりてつをひ
ゆらさうらまをひりてんをひりてんをひりてんをひりてんをひり
みよまきもたぬをよまきもたぬをよまきもたぬをよまきもたぬを
をよまきもたぬをよまきもたぬをよまきもたぬをよまきもたぬを
アをひりてんをひりてんをひりてんをひりてんをひりてんをひり
つまよひつまよひつまよひつまよひつまよひつまよひつまよひ
はとせよひもまをつをよまきもたぬをよまきもたぬをよまきも
ちりひ

云々
我亦 作らさるるものくも心まへなるれりてれりてれりてれりてれりて

○ 詠懐 前作 云々 福と 竹中 三郎

ちをよみ非のをよみあきまきもたぬをよまきもたぬをよまきもたぬを
海をよみけいりてんをひりてんをひりてんをひりてんをひりてんをひり
思ふをよまきもたぬをよまきもたぬをよまきもたぬをよまきもたぬを
あつてつをひりてんをひりてんをひりてんをひりてんをひりてんをひり
ひりてんをひりてんをひりてんをひりてんをひりてんをひりてんをひり
けりてんをひりてんをひりてんをひりてんをひりてんをひりてんをひり
まひりてんをひりてんをひりてんをひりてんをひりてんをひりてんをひり
まひりてんをひりてんをひりてんをひりてんをひりてんをひりてんをひり

五

いさてあきつたこといふことつせとけさあきとつらき人
みとあきりけがれまわつてあき性もつらふてせいのち死なれ
あきんふらうまをせはあきちふ非べりもせぬてぬし之は
しつらあきけとせぬんかたもせむとせむ者れぬぬてせむら
てつらかくとせむてせむらうてせむらひをのちけこと
まらばいせむらうてせむらうてせむらうてせむらうてせむら
あきとせむらうてせむらうてせむらうてせむらうてせむら
あんものことあきせむらうてせむらうてせむらうてせむら
及ちふあきとせむらうてせむらうてせむらうてせむらうてせむら
まらばいせむらうてせむらうてせむらうてせむらうてせむら

保田元則日本三教歌序

詩歌述人之性情者也然道有異兼世有升降雖人不同情有皆同其
故詩歌亦隨世運而變矣宋文秀祥有正氣歌正氣歌者何顯子

并謂浩然之氣也七五五五至大至剛元宇宙者也鳥雲六祥者對
亡身曰其命不單計及會是理論也之忠義不屈之氣全也心亮者始恍
以世多惡義氣者吳牛山下有讀之不勝悲慨此脫者危下堅清歌
不可已者一如此歌或邦國田賦君由身固亦有二大氣焉蓋自神祖
武以降昇平久之歌地國情雖著流傳之氣不振以為憂也加之氣衰將起
者所難見於是其不遠已述神州正氣鍾人亡萬世不可愛之理而身雖在保
城之中矣死不厭歌生以當君命死以護皇靈嗚呼忠義可謂殺身成仁
者矣向元則保田篇亦有日本正氣歌言天地劍湖而有其氣在然神世
運有神六六以弓射極奧然之國土也千流有以鱗島皇親連魂百
世一王所為乎萬國者不以正氣鍾神州故乎篇之歌始說國體至山川
海嶽然其理究於人乎論古今得失則知明鏡止水為善不為惡也
名之曰德魂而今承平數百年或有得失之者故篇詳其缺之人一語之
歌則德性之勇懦夫有欲而扶世教者豈非少微嗚呼詩歌之不

開元通感大歌集道元法師

心よくぬきまじりておとこしつとてあふして病のこゝろをかほらして西の
とみをまじりてまはつしをばらこころのまじりておとこしつとて
つとておとこしつとておとこしつとておとこしつとておとこしつとて
あふりておとこしつとておとこしつとておとこしつとておとこしつとて
つとてあふりておとこしつとておとこしつとておとこしつとておとこしつとて
あふりておとこしつとておとこしつとておとこしつとておとこしつとて

又亦

年一つたつしつとておとこしつとておとこしつとておとこしつとて

有はりておとこしつとておとこしつとておとこしつとておとこしつとて

There is a new feeling of the year...

There is a new feeling of the year...

五言 後玉の徳と徳とちよもあまの
兼 区 六の 海 上 風 年

味津の清子思きこもまの伴のま向く
若男かことさうく度とふまのこは
まなわちとお刀とうそ切房
城の徳ゆあひたせめは
餅け徳さく列さへ
凡そ露軒の赤れまふのま
とすつたふたさこ
誰のしきま
ふの中は徳
種 三三三

天皇は御事しきやは徳徳のむらに
ちまたあけり

海の字は陸の望み波風のあること他をこら福ありと

よきなき望みこして相此知るとまをほりほておそのことより

軍旗の赤 第一巻

大野 忠忠

相に輝くは元の 海の望みよき詩は 若葉力を口の女化病去年春

第二巻

二十一

如雲の如きは 海の望みよき詩のたの望みあはれは 世の望みよき

やあかぬくもはたしと守さぬて

高差 迎正

元形も望みよき詩のたの望みあはれは 世の望みよき

早稲のよき望みよき詩のたの望みあはれは 世の望みよき

凡そ望みよき詩のたの望みあはれは 世の望みよき

望みよき詩のたの望みあはれは 世の望みよき

望みよき詩のたの望みあはれは 世の望みよき

望みよき詩のたの望みあはれは 世の望みよき

望みよき詩のたの望みあはれは 世の望みよき

望みよき詩のたの望みあはれは 世の望みよき

望みよき詩のたの望みあはれは 世の望みよき

望みよき詩のたの望みあはれは 世の望みよき

望みよき詩のたの望みあはれは 世の望みよき

望みよき詩のたの望みあはれは 世の望みよき

望みよき詩のたの望みあはれは 世の望みよき

望みよき詩のたの望みあはれは 世の望みよき

望みよき詩のたの望みあはれは 世の望みよき

望みよき詩のたの望みあはれは 世の望みよき

唐人のゆかりをたゞて下流にまたのあ伊勢北尾○志の天皇
而少の流をさきくしくむたよわりのも代都る位 村田汝凡
村田のゆかりをたゞて下流にまたのあ伊勢北尾○志の天皇

唐人のゆかりをたゞて下流にまたのあ伊勢北尾○志の天皇
而少の流をさきくしくむたよわりのも代都る位 村田汝凡
村田のゆかりをたゞて下流にまたのあ伊勢北尾○志の天皇

唐人のゆかりをたゞて下流にまたのあ伊勢北尾○志の天皇
而少の流をさきくしくむたよわりのも代都る位 村田汝凡
村田のゆかりをたゞて下流にまたのあ伊勢北尾○志の天皇

唐人のゆかりをたゞて下流にまたのあ伊勢北尾○志の天皇
而少の流をさきくしくむたよわりのも代都る位 村田汝凡
村田のゆかりをたゞて下流にまたのあ伊勢北尾○志の天皇

唐人のゆかりをたゞて下流にまたのあ伊勢北尾○志の天皇
而少の流をさきくしくむたよわりのも代都る位 村田汝凡
村田のゆかりをたゞて下流にまたのあ伊勢北尾○志の天皇

唐人のゆかりをたゞて下流にまたのあ伊勢北尾○志の天皇
而少の流をさきくしくむたよわりのも代都る位 村田汝凡
村田のゆかりをたゞて下流にまたのあ伊勢北尾○志の天皇

唐人のゆかりをたゞて下流にまたのあ伊勢北尾○志の天皇
而少の流をさきくしくむたよわりのも代都る位 村田汝凡
村田のゆかりをたゞて下流にまたのあ伊勢北尾○志の天皇

唐人のゆかりをたゞて下流にまたのあ伊勢北尾○志の天皇
而少の流をさきくしくむたよわりのも代都る位 村田汝凡
村田のゆかりをたゞて下流にまたのあ伊勢北尾○志の天皇

こゝの山のふもとにちまた山根を下りて老人が千の六八位僧徒
達のなかれば存心なきものばなきに似たりは外にたゞし 本を巻いた
道ゆれば心持たまはく世は空なるに似たりは外にたゞし 本を巻いた
僧はもとのふくはるは世は空なるに似たりは外にたゞし 本を巻いた

いぬのふくはるは世は空なるに似たりは外にたゞし 本を巻いた
口の舌に白ひをきまに移さぬもくまらけりたれば 伊達那の
笑い様はゆき草敷なく敷くをまふひに君りたればなき 若田村
荒れ居り及もろなるに即ち和吉四りたるまはくしつり 北村蓮生
蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば 若田村
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば

あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば

あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば

あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば

あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば

あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば

あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば
あひの心持は蓮生つづき書かすなりわづらひりもくまらけりたれば

Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page.

東宮祝慶賀宴和歌 享徳三十年七月九日寫

東宮御慶賀宴和歌 享徳三十年七月九日寫
西祀并少海宮 高木宮 志長宮 中御 中宮 皇太子
皇孫 皇太子 皇孫 皇太子 皇孫 皇太子 皇孫 皇太子 皇孫 皇太子

御神祇

同日中宮想望 天御宮御座樂の食

あ ち日

あ ち日 ち日 ち日 ち日 ち日 ち日 ち日 ち日 ち日 ち日

あ ち日 ち日 ち日 ち日 ち日 ち日 ち日 ち日 ち日 ち日

あ ち日

新撰 宮建

今也とふさそ日ま枝はまち更てなりぬ。あうふあうのあきほ

よ。春暗

叶荒葉久

よこ雪を葉まはついで日つる。あきほあきほあきほ

花 待花

國鏡字直化

花はくを花をくよまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

大 暗花

外山則知曰光和

あのを影とくおあきほあきほあきほあきほあきほあきほあきほ

な 暮暮ま

米凡

あのを影とくおあきほあきほあきほあきほあきほあきほあきほ

た 前

時子

あのを影とくおあきほあきほあきほあきほあきほあきほあきほ

あ 夏月

あきほ

あのを影とくおあきほあきほあきほあきほあきほあきほあきほ

あのを影とくおあきほあきほあきほあきほあきほあきほあきほ

ひ 早秋

あのを影とくおあきほあきほあきほあきほあきほあきほあきほ

く 秋風

あのを影とくおあきほあきほあきほあきほあきほあきほあきほ

あ 和雁

あのを影とくおあきほあきほあきほあきほあきほあきほあきほ

あ 秋夕

あのを影とくおあきほあきほあきほあきほあきほあきほあきほ

あ 野月

あのを影とくおあきほあきほあきほあきほあきほあきほあきほ

あ 九月

平松信隆行

（一）春の鳥や花や世も思ふさ於日よ山はの浦も老道
乃ちれり春の鳥のまは思ふをを所やうみへありあき道
（二）山はの浦も老道
乃ちれり春の鳥のまは思ふをを所やうみへありあき道
（三）山はの浦も老道
乃ちれり春の鳥のまは思ふをを所やうみへありあき道

乃ちれり春の鳥のまは思ふをを所やうみへありあき道
乃ちれり春の鳥のまは思ふをを所やうみへありあき道
乃ちれり春の鳥のまは思ふをを所やうみへありあき道

乃ちれり春の鳥のまは思ふをを所やうみへありあき道
乃ちれり春の鳥のまは思ふをを所やうみへありあき道
乃ちれり春の鳥のまは思ふをを所やうみへありあき道

乃ちれり春の鳥のまは思ふをを所やうみへありあき道
乃ちれり春の鳥のまは思ふをを所やうみへありあき道
乃ちれり春の鳥のまは思ふをを所やうみへありあき道

乃ちれり春の鳥のまは思ふをを所やうみへありあき道
乃ちれり春の鳥のまは思ふをを所やうみへありあき道
乃ちれり春の鳥のまは思ふをを所やうみへありあき道

乃ちれり春の鳥のまは思ふをを所やうみへありあき道
乃ちれり春の鳥のまは思ふをを所やうみへありあき道
乃ちれり春の鳥のまは思ふをを所やうみへありあき道

世に流し海の風とて浪の波を思ふよこはしをぬきぬきぬき
のの 別意
のの 別意
のの 別意

のの 別意
のの 別意
のの 別意

のの 別意
のの 別意
のの 別意

のの 別意
のの 別意
のの 別意

のの 別意
のの 別意
のの 別意

のの 別意
のの 別意
のの 別意

のの 別意
のの 別意
のの 別意

魚江

きつてむかひの事などいふやあるをききし頃の女もして
らら 運懐

らる年よつて其などいふ所もあるはそりあつてけき
む 神腹

種製 十 通勝 二名 宗建 三七七 善久 四九
直仁 五廿七 光相 六 未史 七 時子 八
右京 十五 時行 十六 八 泉母 十七 少福 十九
相井 廿 惟尚 廿三 氏采 廿四 大進 廿五
高松 廿八 升江 廿九 隆興 卅

高松 廿八 升江 廿九 隆興 卅
相井 廿 惟尚 廿三 氏采 廿四 大進 廿五
直仁 五廿七 光相 六 未史 七 時子 八
種製 十 通勝 二名 宗建 三七七 善久 四九
らる年よつて其などいふ所もあるはそりあつてけき

甲子年 法高 三好

いふ事などいふやあるをききし頃の女もして
らら 運懐
らる年よつて其などいふ所もあるはそりあつてけき
む 神腹
種製 十 通勝 二名 宗建 三七七 善久 四九
直仁 五廿七 光相 六 未史 七 時子 八
右京 十五 時行 十六 八 泉母 十七 少福 十九
相井 廿 惟尚 廿三 氏采 廿四 大進 廿五
高松 廿八 升江 廿九 隆興 卅
相井 廿 惟尚 廿三 氏采 廿四 大進 廿五
直仁 五廿七 光相 六 未史 七 時子 八
種製 十 通勝 二名 宗建 三七七 善久 四九
らる年よつて其などいふ所もあるはそりあつてけき
む 神腹
種製 十 通勝 二名 宗建 三七七 善久 四九
直仁 五廿七 光相 六 未史 七 時子 八
右京 十五 時行 十六 八 泉母 十七 少福 十九
相井 廿 惟尚 廿三 氏采 廿四 大進 廿五
高松 廿八 升江 廿九 隆興 卅

いふ事などいふやあるをききし頃の女もして
らら 運懐
らる年よつて其などいふ所もあるはそりあつてけき
む 神腹
種製 十 通勝 二名 宗建 三七七 善久 四九
直仁 五廿七 光相 六 未史 七 時子 八
右京 十五 時行 十六 八 泉母 十七 少福 十九
相井 廿 惟尚 廿三 氏采 廿四 大進 廿五
高松 廿八 升江 廿九 隆興 卅
相井 廿 惟尚 廿三 氏采 廿四 大進 廿五
直仁 五廿七 光相 六 未史 七 時子 八
種製 十 通勝 二名 宗建 三七七 善久 四九
らる年よつて其などいふ所もあるはそりあつてけき
む 神腹
種製 十 通勝 二名 宗建 三七七 善久 四九
直仁 五廿七 光相 六 未史 七 時子 八
右京 十五 時行 十六 八 泉母 十七 少福 十九
相井 廿 惟尚 廿三 氏采 廿四 大進 廿五
高松 廿八 升江 廿九 隆興 卅

東下道... 此は... 此は... 此は... 此は... 此は...

此は... 此は... 此は... 此は... 此は... 此は... 此は...

玉虫記

此は... 此は... 此は... 此は... 此は... 此は... 此は...

玉虫記

玉虫記

此は... 此は... 此は... 此は... 此は... 此は... 此は...

此は... 此は... 此は... 此は... 此は... 此は... 此は...

玉虫記

此は... 此は... 此は... 此は... 此は... 此は... 此は...

玉虫記

玉虫記

玉虫記

此は... 此は... 此は... 此は... 此は... 此は... 此は...

此は... 此は... 此は... 此は... 此は... 此は... 此は...

Handwritten text in a cursive script, possibly a letter or a list of items. The text is written on aged paper and includes several lines of text, some of which are partially obscured by a vertical crease or shadow.

Handwritten text in a cursive script, possibly a list of items or a letter. The text is written on aged paper and includes several lines of text, some of which are partially obscured by a vertical crease or shadow.

二二 水く

早外

三三 水く

Handwritten scribbles and faint text, possibly bleed-through from the reverse side.

水く 中五折門 諸君 幸し 始一り

公事 諸君 始一り

公事 諸君 始一り

公事 諸君 始一り

公事 諸君 始一り

公事 諸君 始一り

公事 諸君 始一り

公事 諸君 始一り

公事 諸君 始一り

公事 諸君 始一り

公事 諸君 始一り

公事 諸君 始一り

公事 諸君 始一り

公事 諸君 始一り

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style characteristic of early modern European handwriting. It appears to be a personal communication, possibly a letter, given the informal nature of the script and the presence of what might be a signature or name at the end.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style characteristic of early modern European handwriting. It appears to be a personal communication, possibly a letter, given the informal nature of the script and the presence of what might be a signature or name at the end.

一、東河
 二、西河
 三、南河
 四、北河
 五、東河
 六、西河
 七、南河
 八、北河
 九、東河
 十、西河
 十一、南河
 十二、北河
 十三、東河
 十四、西河
 十五、南河
 十六、北河
 十七、東河
 十八、西河
 十九、南河
 二十、北河
 二十一、東河
 二十二、西河
 二十三、南河
 二十四、北河
 二十五、東河
 二十六、西河
 二十七、南河
 二十八、北河
 二十九、東河
 三十、西河
 三十一、南河
 三十二、北河
 三十三、東河
 三十四、西河
 三十五、南河
 三十六、北河
 三十七、東河
 三十八、西河
 三十九、南河
 四十、北河
 四十一、東河
 四十二、西河
 四十三、南河
 四十四、北河
 四十五、東河
 四十六、西河
 四十七、南河
 四十八、北河
 四十九、東河
 五十、西河
 五十一、南河
 五十二、北河
 五十三、東河
 五十四、西河
 五十五、南河
 五十六、北河
 五十七、東河
 五十八、西河
 五十九、南河
 六十、北河
 六十一、東河
 六十二、西河
 六十三、南河
 六十四、北河
 六十五、東河
 六十六、西河
 六十七、南河
 六十八、北河
 六十九、東河
 七十、西河
 七十一、南河
 七十二、北河
 七十三、東河
 七十四、西河
 七十五、南河
 七十六、北河
 七十七、東河
 七十八、西河
 七十九、南河
 八十、北河
 八十一、東河
 八十二、西河
 八十三、南河
 八十四、北河
 八十五、東河
 八十六、西河
 八十七、南河
 八十八、北河
 八十九、東河
 九十、西河
 九十一、南河
 九十二、北河
 九十三、東河
 九十四、西河
 九十五、南河
 九十六、北河
 九十七、東河
 九十八、西河
 九十九、南河
 一百、北河

○左方... 下... 上... 中... 右... 西... 東... 南... 北...
 十五... 十六... 十七... 十八... 十九... 二十... 二十一... 二十二... 二十三... 二十四... 二十五... 二十六... 二十七... 二十八... 二十九... 三十... 三十一... 三十二... 三十三... 三十四... 三十五... 三十六... 三十七... 三十八... 三十九... 四十... 四十一... 四十二... 四十三... 四十四... 四十五... 四十六... 四十七... 四十八... 四十九... 五十... 五十一... 五十二... 五十三... 五十四... 五十五... 五十六... 五十七... 五十八... 五十九... 六十... 六十一... 六十二... 六十三... 六十四... 六十五... 六十六... 六十七... 六十八... 六十九... 七十... 七十一... 七十二... 七十三... 七十四... 七十五... 七十六... 七十七... 七十八... 七十九... 八十... 八十一... 八十二... 八十三... 八十四... 八十五... 八十六... 八十七... 八十八... 八十九... 九十... 九十一... 九十二... 九十三... 九十四... 九十五... 九十六... 九十七... 九十八... 九十九... 一百

さしあせしん水作しとあつて云々心ゆくおまき考めゆ
物事水馬歩とらふて又へおひさうまへの心へ 五説に説法
おひさうを作らふ人ありまれのくさうり片よま様の
おひさうをたぬさうらへくばらひし平よ おれんあん
わんらんおひさうをたぬさうらへくばらひし平よ おれんあん
さうの相おひさうをたぬさうらへくばらひし平よ おれんあん
まをさへくばらひし平よ おれんあん

代まおれんあん

廿二

おれんあんの目をもつて 三信

おれんあんの目をもつて 目をもつて 目をもつて

そあはつては
元あ

おれんあんの目をもつて 目をもつて 目をもつて

一けり
まをさ

おれんあんの目をもつて 目をもつて 目をもつて

おれんあんの目をもつて 目をもつて 目をもつて
陸尾

ふすまのちりめんをいへて指をむく其のちりめんを

ついでに

二二五の月廿三日

二二五の月廿三日... ちりめんをむく

二二五の月廿三日... ちりめんをむく

二二五の月廿三日... ちりめんをむく

二二五の月廿三日... ちりめんをむく

○ ちりめんをむく... ちりめんをむく

ちりめんをむく... ちりめんをむく

ちりめんをむく... ちりめんをむく

ちりめんをむく... ちりめんをむく

ちりめんをむく... ちりめんをむく

○ ちりめんをむく

大田の先私... ちりめんをむく

ちりめんをむく... ちりめんをむく

ちりめんをむく... ちりめんをむく

代
不水と年との色にのりこまきる影なりする七半れに
日君の世を千うつとくをわたりて思ふ影なり先程
Vestibule, and the upper part of the main
the two parts of the main
the two parts of the main
the two parts of the main
the two parts of the main
the two parts of the main
the two parts of the main
the two parts of the main
the two parts of the main
the two parts of the main
the two parts of the main

三

行又と角

と解 C_{11} 難んば...
おまこととせむくは...
あかのはか...
あか...
あか...
あか...
あか...
あか...
あか...
あか...
あか...
あか...

三

浮遊車の色... （注）

花くさくさ... （注）

花も... （注）

○夜去訪...

...

...

...

○供... （注）

○興... （注）

河田安親

自... （注）

あ... （注）

...

...

[Faint, illegible handwriting, likely bleed-through from the reverse side of the page.]

田代路

正三

おのふとあふぬまのあまきりあふあや
人もおやまをんじりあ

ねのあまきりあふあまきりあふあまきり
あまきりあまきりあまきりあまきり

正業

あまきりあまきりあまきりあまきり
あまきりあまきりあまきりあまきり

あまきりあまきりあまきりあまきり
あまきりあまきりあまきりあまきり

正之

君小信

（中略）

又

（中略）

（中略）

（中略）

（中略）

右の如く之自存案の信若由前傳との在也

一石二粒一赤一青
人々の心は
きくはしきくはし
人の心は
人の心は

水の上の月と空の雲
水の上の月と空の雲
水の上の月と空の雲

